
原子力災害の記憶構築をめぐる

— チェルノブイリと福島ミュージアムの比較検討

村本 邦子

立命館大学大学院人間科学研究科教授

河野 暁子

立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程

1章 はじめに

ミュージアムとは、科学的、歴史的、芸術的価値によって、物の収集、維持、研究、展示、教育的解釈を行うための施設であり、そのなかでも、メモリアル・ミュージアムは、集合的苦悩とむすびついた歴史的出来事に捧げられるものである (Williams 2007)。竹沢 (2015) は、ミュージアムを記憶の装置、記憶のテクノロジーと呼び、トラウマとしての戦争や公害、疫病、災害などの出来事に対し、集団の記憶を焦点化させ、定型化するにあたって重要な役割を果たすと指摘する。

筆者らは暴力とトラウマに長く関わってきた臨床心理士であり、社会が集合的トラウマをどのように扱ってきたかに関心を持ちつつ、国内外のさまざまなメモリアル・ミュージアムを訪れてきた。精神分析家の Koh (2020) は、個人とトラウマの関係を集団や文化にあてはめ、コレクティブ・トラウマという概念を提起した。集団がトラウマを抱え、それに対処できないでいると、集団も症状を抱え、時間をかけてゆっくりと根底から崩壊していくかもしれない。これを乗り越えていくためには、関係者が会して共に想起し、語り合い、何が起こったのか、そこで自分たちがどんな経験をし、何を感じたのか、それはどのような意味を持つのかといったことを共有することが有効であるという。社会が経験したトラウマティックな出来事は、集合的な体験でありながら、個別の体験でもあることから、集団の成員に

よる経験の相違を受け入れつつ、一定程度の合意が得られる出来事全体の理解が求められる。メモリアル・ミュージアムは、そのようなプロセスを促進し、社会の記憶を構築し、伝承し、また再構築する場であるといえるだろう。

関東大震災の東京都復興記念館、雲仙普賢岳噴火の雲仙岳災害記念館、阪神・淡路大震災の人と防災未来センターなど、災害が起きた日本各地に、災害を扱うメモリアル・ミュージアムがある。東日本大震災から十年目を迎え、東北の各地にも、震災遺構や慰霊碑とともに、メモリアル・ミュージアムが設置されつつある¹⁾。東日本大震災というコレクティブ・トラウマをどのようなものとして共有し、記録し、伝承していくのがさまざまに模索されている (たとえば、山内 2019、竹沢 2015、山名・矢野 2017 など)。

その一方で、東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故 (以後、原子力発電を原発と表記する) は、単なる自然災害とは言い難く、技術の発展にともなって引き起こされた人的災害の側面が強いことから、議論すること自体がタブーとなりがちである。2020年9月20日になって、ようやくメモリアル・ミュージアムと呼ぶことのできる東日本大震災・原子力災害伝承館 (以後、伝承館と省略) がオープンした。それまで、原発事故と関わる施設としては、福島県環境創造センター交流棟 (通称コミュタン福島) を筆頭に、環境再生プラザ (旧除染情報プラザ)、特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま (以

後、リプルンふくしま)、東京電力廃炉資料館(以後、廃炉資料館)、原発災害情報センターがあった。

筆者らは、2018年12月、原発災害情報センターとコミュタン福島を訪れ、経済や権力が集合的記憶を作ると感じ、そのあまりに対照的な展示に驚いた。その後、後藤忍氏を訪れ、話を伺う機会があった。後藤氏は、コミュタン福島をチェルノブイリ・ミュージアムと比較し、「チェルノブイリ・ミュージアムは長い時間を重ねながら、市民の努力があって、展示内容を変えてきた。福島ミュージアムも時間をかけて私たちが変えていかなければならない」と言った²⁾。この言葉に刺激を受け、2019年9月、筆者らはチェルノブイリに行った。

本論は、チェルノブイリ・ミュージアムと福島にある関連施設の展示内容を比較しながら、ミュージアムが原発災害を巡る集合的記憶をどのように扱っているのかを検討し、今後、どのように改善しているのかを考えようとするものである。

2章 ミュージアムの記憶は誰のものか

1節 主体、目的、宛先

最初に問うべきは、ミュージアムが扱う記憶は、誰による誰のためのものなのか、設置の主体、目的、宛先であろう。Williams (2007) は、常に、悲劇の記憶と解釈の権利を所有するのは誰かが争われ、それが重要な政治的意味を持つてくると指摘している。

たとえば、ウクライナをはじめとする東欧において、スターリニズムとナチズムは、自ら行った大量虐殺を相手の責任にすることで正当化するという行ってきた。2019年9月、ガイドブックでナチスドイツへのレジスタンスをテーマにしたミュージアムがあるとの情報を得て、行ってみた。オデッサのパルチザン栄光博物館には、看板も説明もなく、門がかけられ、錆びれていた。インターネット上では、数か月前まで訪れた人たちの体験談が確認できていたが、現地の人に尋ねると、「あれは旧ソ連のプロパガンダだ」と一笑に付された。キエフで宿を

取ったホテルの前の独立広場には、ユーロマイダーン革命に関する野外展示があった。2013年から2014年の冬に、この場所で、SNSから始まった大きな市民運動が起き、百名を超える市民が殺され、親ロシア政権が倒れた。この政変はロシアとの関係を悪化させ、クリミア併合とウクライナ東部での戦争を引き起こした。観光地でもある寺院の壁には、クリミア危機の犠牲者の顔写真が並んでいた。すべては生々しく、ウクライナ自体が激動のさなかにあることを痛感させられた。ミュージアム設置の主体が誰かは、展示に決定的な影響を与えるだろう。

竹沢(2015)は、初期のミュージアムが、過去に生じた大事件のいわば証言としてのモノを展示することで、国家の歴史を再構成し、ナショナリズムと民族意識の高揚を目的として建設されてきたことを指摘し、これを国民国家の「カルトとしてのミュージアム」と呼んだ。その展示の構造はほぼ同一で、「敵」の強大化のプロセスの再現、自国民・自集団の抑圧と大量虐殺、それに対する自国民・自集団の抵抗の称賛、最後に付け足しのように平和を希求するという形をとるといふ。

チェルノブイリ・ミュージアムと福島ミュージアムの展示内容を見るに先立って、まずは、それぞれのミュージアムの主体、目的、宛先を確認する(表1)。

2節 国立チェルノブイリ・ミュージアム

1986年4月26日、旧ソビエト連邦(以後、旧ソ連と表記する)、現ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所4号機で、大規模な原子力事故が起こった。4基の原子炉が稼働しており、5号機、6号機の建築が進められていた。事故前日、4号機では停電時の電力供給実験が予定されていたが、制御棒の設計ミスと操作ミスによるメルトダウンで、二度の水蒸気爆発が起き、減速材に使われていた黒鉛が引火した。鎮火するまでの十日間、放射線物質が放出され、広範囲に拡散した。事故に対応した作業員28名と消防士6人が急性放射線障害で亡くなっている(東2013; モールド2013)。

チェルノブイリ・ミュージアムは、原発事故から

表1 各ミュージアムの主体・目的・宛先

施設名	主体	目的	宛先
チェルノブイリ・ミュージアム	ウクライナ国	原発事故の教訓を伝承する	世界中の人々
福島 の ミ ュ ジ ア ム	伝承館	福島県	原発災害の復興と教訓を発信し、復興の加速化に寄与する
	コミュニティ福島	福島県	県民の疑問に答え、放射線や環境問題を理解する
	環境再生プラザ	環境省・福島県	環境回復の歩みや放射線中間貯蔵などに関する情報を伝える
	リプルンふくしま	環境省	環境再生と復興への歩みを発信
	廃炉資料館	東京電力	事故の反省と教訓の伝承、廃炉事業の見える化
	原発災害情報センター	NPO・市民有志	事故を市民の力で風化させない

1年後の1987年、事故現場の消火活動にあたった消防士たちをたたえる小さな写真展「勇気と栄光の記憶」から始まった。写真展示は消防のオフィスで行われた。旧ソ連政権下では、国威発揚のイデオロギーとも結びつき、消防士は英雄扱いだだったが、亡くなった原発関係者のことや移住や強制避難などの問題については公式に語られることがなかった。この段階では、上述したような「カルトとしてのミュージアム」の範囲からはずれないものであったと推測される。

1991年、旧ソ連が崩壊し、ウクライナが独立すると、機密文書の公開が始まり、破棄を命じられていた多くの資料も展示されるようになった。国外からの視察団が訪問するようになり、1992年に博物館へと組織を拡充する。開設当初は200点だった展示品も、現在では、総面積1,100m²の三つの展示室に7,000点以上が公開されている（コロレーヴスカ2013）。

チェルノブイリ・ミュージアムは、事故地から約100キロ離れたキエフ市の中心部に位置する。元消防署だったことを表すように細長い2階建ての建物で、玄関部分だけ3階の塔のようになっている。全体が淡いクリーム色に白い縁取り、木製アーチ型の扉と窓で、洒落た印象を与える。入り口には、ウクライナ語と英語で、「国立チェルノブイリ・ミュージアム」と書かれた地味な表札がかけられ、玄関横の小さな庭には、樹木と祈りを捧げる女性像がおかれ、駐車場には、事故当時使われていたという車両が並ぶ。

公式HP³⁾には、「ミュージアムは、事故処理作業員や事故の証人たち、犠牲者といった何千もの人々の運命を通して、この事故がどれほど大きなものだったかを理解してもらうため、人々の役に立つことが使命だと考えています。そして、文明と地球を危機にさらした科学技術と人間との共存はかけがえのないものであるということへの理解を促し、世界がチェルノブイリの教訓を忘れないよう、生活のあらゆる場面で事故の教訓を活かせるよう次世代に警告していきます」とある。

資料自体は旧ソ連時代のものであるためロシア語だが、解説文はウクライナ語である。現地のガイドは、「チェルノブイリ博物館はウクライナ国によって創立された国立博物館なので、館内の展示品の説明看板上で使う言語も、博物館内の見学時のガイド説明も原則としてウクライナ語でなければなりません」と言う。2016年時点ではロシア語が使用されていたので、それ以後に書き換えられたものと思われる。2014年のクリミア危機以来、ウクライナのロシアへの反発と独立意識が一層高まっており、2019年7月には国連安全保障理事会によるウクライナの言語法（国家語としてのウクライナ語の機能保障法）に関する会合が招集されるなど、葛藤が続いている。

英語での説明は少ないが、英語、ドイツ語、日本語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、ウクライナ語の8種類のオーディオガイドが用意されていた。入場料は24UAH、日本語の音声ガイド60UAH、写真撮影料が48UAHで計

132UAH、約600円で、すべての展示を撮影することができる。

HPの記載、および多国語に開けた展示から、チェルノブイリ・ミュージアムは、ウクライナ政府が主体となり、チェルノブイリ原発事故とその教訓を記録するとともに、文明と地球を危機にさらした科学技術と人間とのかけがえのない共存について世界に発信しようと志す姿勢が伺える。

3節 福島のミュージアム

2020年9月20日、福島県が双葉町に開館したばかりの東日本大震災・原子力災害伝承館は、原発事故を伝える初の公立ミュージアムであり、東京電力福島第一原発の北側約3キロにある。3階建て、延べ床面積は約5,300平方メートルである。公式HP⁴⁾によれば、その基本理念は、①原子力災害と復興の記憶や教訓の「未来への警鐘・世界との共有」、②福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす「防災・減災」、③福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による「復興の加速化への寄与」の3つである。総事業額の53億円は国が全額負担するが、福島県が主体となり、原発災害と復興の記憶や教訓を世界に向けて発信し、復興の加速化に寄与することを目的としている。運営は公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構に委託され、館内スタッフは同機構の職員である。入場料は600円で、展示の解説文には英訳が併記されている。なお、館内撮影はすべて禁止されている⁵⁾。

コミュタン福島は、2016年、原発から約50キロ離れた三春町にオープンし、本館、研究棟を含む福島県環境創造センターに国家予算200億円が投じられ、公式HP⁶⁾によれば、「県民の皆さまの不安や疑問に答え、放射線や環境問題を身近な視点から理解し、環境の回復と創造への意識を深めていただくための施設」である。被災の中心的な県として、福島県が主体となり、福島県民へ放射線や環境問題の理解をうながすための施設と言えらる。入場料は無料であり、三春駅からのバスも無料で利用す

ることができる⁷⁾。福島県内の小学校には、貸切バスに要する経費を補助し、学習活動の一環としての訪問を促している。「福島県の環境回復」という言葉は原発事故の存在を仄めかしており、震災伝承施設として登録されているものの⁸⁾、原発事故の伝承は目的にない。

福島駅近くにある環境再生プラザは、環境省と福島県が主体となり、「ふくしまの環境回復の歩みや放射線中間貯蔵などの環境再生に関する情報」を伝える目的で、2012年に設置したものである。2017年3月に福島県内の面的除染がほぼ完了し、環境省に環境再生・資源循環局が設置されたのを受け、7月に施設の名称も環境再生プラザへ変更したとされている。入場料は無料である⁹⁾。

リプルンふくしまは、2018年、環境省が主体となり、原発から約10キロ離れた双葉郡富岡町に設置した。原発事故で大量に発生した放射性物質に汚染され、「いまなお県内各地に保管されている除去土壌や特定廃棄物などを国が責任をもち、県や市町村と協力しながらできるだけ早く、安全に、確実に処理を進めています。福島県環境再生と復興への歩みを、県内の人をはじめ、日本中、世界中の人に伝えていきたい」と書かれている。このミュージアムは国が出資し、福島のために、国内外に向けて福島県環境再生と復興への歩みを伝えることを目的としている。入場料は無料である^{10) 11)}。

廃炉資料館は、東京電力ホールディングス(TEPCO)が設置主体であり、2018年、富岡町にオープンした。もとは福島第二原発のPR施設だったものである。パンフレットには¹²⁾、「原子力事故の記憶と記録を残し、二度とこのような事故を起こさないための反省と教訓を社内外に伝承することは、当社が果たすべき責任の一つです。長期にわたる膨大な廃炉事業の全容が見える化し、その進捗をわかりやすく発信することは、国内外の英知の結集と努力を継続させていく上でも大切です。関係施設及び周辺地域等との連携を図りながら、原子力事故を後世にお伝えしていくとともに、復興に向けた皆さまの安心につなげていくよう努めてまいります」とある。入場料は無料である¹³⁾。原発事故を社内外で

伝承し、廃炉事業の全容を伝えることを目的としている。展示に英語表記が見られることから、日本国内だけでなく世界へ届けようとしている。

原発災害情報センターは、2013年、事故地からおよそ100キロ南西にある白河市にオープンした。NPO法人アウシュビッツ平和博物館と市民有志が母体となり、国内外からの寄付金3,000万円によって設立された。公式HP¹⁴⁾によれば、「福島第一原子力発電所の事故を市民の力で風化させないことを目的に設立」され、「1. 福島原発事故の被害に係る資料、関連情報を収集し正確に発信する。機関誌の発行等。2. 過去—現在—未来をつなげる各種企画展示と集会の開催。3. 県内外の人々が自由に意見交換やおしゃべりし、復興へ向けて励ましあえる場を作る。4. 将来、原発事故が正確に検証された時点で、広島や長崎の原爆資料館と同じような役割を果たせるように語り継ぐ施設を目指す。」とされている。全国と地域のボランティア、専門家ボランティアによって運営され、手作り感が強く、被害者の視点に立った市民による市民のためのミュージアムと言えるだろう。入場料は無料である¹⁵⁾。

伝承館には日本語・英語の二か国語表記があり、コミュタン福島の展示は、スマートフォンでQRコードを読み取れば、英語、中国語、韓国語の説明を得ることができる。その他の施設では、英語表記はごく一部にとどまる。

3章 チェルノブイリ・ミュージアムは 原発事故をどのように展示しているか

1節 福島原発事故の展示

チェルノブイリ・ミュージアムは、1階が企画展示、2階は事故および事故対応、事故の影響と国際的対応、メモリアルホールとなっており、展示は原発事故に特化されている。そして、1階の企画展示の半分は福島原発事故にあてられていた。

受付に向かって左手正面つきあたりには、液晶画面が福島原発事故の映像を映し出し、その両側に、ウクライナ語（左）と日本語（右）で書かれたメッ

セージが展示されている。「桜の枝—煙の美女／この枝に歩み寄って、／優しく抱きしめる。／チェルノブイリから／宜しくと伝えておく。／桜が息で返事をする。／全世界が悲しみに暮れ、／皆が心配になり／祈りが天国まで響く／その中に私たちの声／私達はあなたと共にいる。／桜—私たちの姉妹。／傷が癒されるように／祈りを捧げている。／諦めないで！／あなたの兄弟／キエフの栗の木より」。天井から、桜を背景に白い衣装を身につけ飛翔する人形が吊り下げられている（写真1）。福島が女性で、チェルノブイリが男性で表象される意味は不明だが、私たちは兄弟姉妹であり、家族であると呼びかけている。

壁には「福島の祈り」の小さいちらしが貼られており、ミュージアムのHP¹⁶⁾を参照すると、これは2013年7月9日から開催した特別展で、写真家、ジャーナリスト、被災者、ボランティアなど36の個人と団体が撮影した120枚の写真、福島県内の被災地の文化や伝統工芸を伝える展示品、避難区域や放射能汚染地域の地図、事故当時の様子がわかる新聞などが展示された。ここは、内容をアップデートしながら、いまや常設化しているように見える。

日本における原発の現在の状況を示す日本地図、放射線量の変移予測地図、地震・津波被害と爆発事故の新聞記事、双葉町の「原子力明るい未来のエネルギー」の看板の写真、白い防護服を着た作業員や除染完了後の公園（線量計は1.685 μ Sv/hを示している）、積み上げられたフレンコンバック、避難家族や自死遺族、甲状腺検査を受ける子どもの写真や、原発反対デモの新聞記事もあった。原発に希望を託していた過去、災害と事故、その影響の深刻さと回復の困難さ、原発への反対を取り扱っている。

残り半分の展示スペースには、ウクライナの民族衣装を身につけた小さな人形と共に、福島の起き上がりこぼしが並べられていた。天井には、チェルノブイリ原発事故によって消滅した村の標識と鯉のぼりが吊られ、それらは階段の天井へと続いていく。鯉のぼりは、福島大学の「鯉のぼりプロジェクト」より寄贈された復興のシンボルとのことである。チェルノブイリの失われた町と福島の復興への希望



写真1 福島へのメッセージ



写真2 階段



写真3 事故の夜

のイメージを融合させ、原発事故を人類普遍のテーマとして視覚化しているように感じられる。

2節 チェルノブイリ原発事故の展示

2階のフロアは、チェルノブイリ原発事故に関する展示にあてられている。階段には、大きなリングの木が描かれ、細かく分かれた枝にはたくさんのリングの実がなり、落ちている（写真2）。リングの木のイメージは後の展示でも再現される。エデンの園の知恵の木が重なるが、東（2013）は、大きく伸びる枝が避難住民を、実が次世代の子どもたちを意味し、離散（ディアスポラ）のイメージであると説明する。階段を上り振り返ると、標識の村の名前にはすべて赤の斜線がひかれていた。事故で消滅した76の村である。

2階正面には大きなホールがあり、左右は展示室となっている。右側は事故および事故対応の展示であるが、薄暗い中に青いライトに照らされて、大きな消防用のホース、消防士と作業員の等身大人形、事故で止まった1時23分を示す時計が天井から吊るされている。いずれも実物だろう。「事故の夜」

をテーマとする展示であり、人形の背後には事故処理に当たったたくさんの消防士の写真が並べられている（写真3）。

天井にも壁にもショーケースにも、夥しい数の顔写真、関連のドキュメント、勲章、衣服、眼鏡、手紙、日記などの遺品が所狭しと展示され、オーディオガイドや英語の説明文から、原発事故の経過、事故当時の原発内の様子、命がけて事故収束にあたった人々のことがわかる。遠隔操作のブルドーザーやロボットでは放射能で電気回路が故障してしまうので、事故による火災を消火し、瓦礫を取り除き、汚染廃棄物を地下深くに埋める事故処理作業に、人間があたるしかなく、旧ソ連は、現地に600万人を送り込んだ。作業にあたった消防士、作業員、兵士たちは、「リクビダートル（ロシア語で後始末をする人の意味）」と呼ばれる。作業には高い放射能被曝を伴い、急性放射線障害で亡くなったり、癌を発

症したり、病気や障害を抱えた人々がいた。爆発とともに、発電所内にいた2人が死亡し、急性放射線症候群と診断された救急隊員134人のうち、28人が数カ月以内に亡くなった¹⁷⁾。

展示を見れば、その人が消防士だったのか、作業員だったのか、看護師だったのか、どのような状況で事故収束と関わったのかが推測できるし、これまで公開されてきた書物やドキュメンタリーなどで見てきたことから、誰と特定できる人々もいる。殉死した人々には、放射線の危険を示す黄色と赤の小さなバッジがおかれている。展示は、この事故によっていかに多くの犠牲者が出たのかを示し、一人一人の顔と物語が見えるようになっている。反対側の壁には、怖れ、悲しみ、悲劇などとタイトルがついたチェルノブイリ原発と人々の写真パネルが展示されていた。

奥の方では、旧ソ連の隠蔽と情報操作についても展示されていた。旧ソ連は当初この事故を隠し、事故から2日後、スウェーデンが異変に気づいたところから発覚した。1986年にソビエト政府が国際原子力機関に提出した報告書によれば、事故の原因は運転員の規則違反の積み重ねで起こったとされ、非公開裁判で6名が罪を被り、服役させられた。1991年の再調査報告書で原子炉の欠陥が原因であるとの結論が出され、6名の名誉回復がなされた。当時のチェルノブイリ原発事故の報道に関する世界各国の新聞記事と並べられ、旧ソ連の新聞の扱いがいかに小さかったが可視化されていた。

事故処理の現場を記録した映像とともに、防護服を身に着けた等身大の人形が置かれていた(写真4)。鎧のように胸と性器の部分に放射能を遮るよう鉛の板をあてている。放射線量があまりに高く、作業は2分が限界だったという。

放射性物質探知機、汚染を表す地図、事故前後のプリピャチの街、避難の写真や映像もあった。キエフでは、5月1日にメーデーのパレードがあり、住民たちは何も知らされないまま参加していた。オーディオガイドは、子どもの甲状腺癌が2010年時点で6,250例報告されていると言っていた。一番奥には、原発事故のジオラマ映像があり、事故前から事



写真4 防護服

故、事故後の石棺で覆われるまでのプロセスが描かれている。

事故および事故対応の展示から、事故の影響の展示へ進んでいくと、赤、青、緑、黄、紫と色を変えながら照明をあてられた大きなリングの木の造形がある(写真5)。リングの木は、小さなベビーベッドを突き抜け、天井に向かって伸びていた。枯れているのか葉はついていない。地面には、地層のように、たくさんの家族写真や木製のフレームが重ねられ、所々に真赤なリンゴの実が落ちている(写真6)。リングの木の枝には家族写真が吊られ、木を囲む壁には、フレームに入った家族写真が飾られている。これらは、立ち入り禁止地区に残されていた写真である。禁断の実を食べ、生命の木を枯らしてしまった人間の軌跡であろうか。おどろおどろしくインパクトのある造形である。

その隣には、チェルノブイリ周辺のジオラマや事故後の写真、世界のアーティストによる絵画、医療者や検査を受ける子どもたちの写真、動植物への影響が示されていた。松の木が放射線を吸収してキエフの被害が軽減されたという松の枝の標本があった



写真5 リンゴの造形



写真6 リンゴの根元

が、松の木はオレンジ色に変色し、「オレンジの森」と呼ばれるようになった。動物の奇形は3倍になったそうで、頭がひとつ、胴体がふたつで生まれた子豚の標本と写真、研究論文が展示されていた（写真7）。子豚は、放射線量が高かったジトミール州で事故の1年後に生まれたものである。思わず目を背けたいくなる。

それから、子どもたちの診療に用いられた器具や白衣、診療の写真の展示があり、出口近くには、立入禁止区域内から避難する人や、事故処理にあたっ



写真7 子豚の奇形

た作業員たちが使用していた放射線測定ゲートの実物が置かれていた。

ここでは、原発事故による放射能の影響が世代を越えて受け継がれていくこと、修復のためには気の遠くなるような長い時間がかかることを見せつけている。後の世代に大きなつげを払わせることになった罪や後悔、悲しみ、諦め、そして、それらを抱えて生きていかねばならないという静かな決意が感じ取れる。

最後は、広島、長崎に関する展示で、ガラスケースの中に、原爆の写真と新聞記事、原爆ドームの写真、被爆者の絵、日本で出版された関連の書籍や新聞、イベントちらし、折り鶴などがあつた。また、ユニセフや赤十字、交流のあるさまざまな国の市民団体との関係を示す展示があり、子どもを守る国際的な連帯を表していた。

チェルノブイリ・ミュージアムの展示からは、安全と言われていた原発に設計上のミスがあつて事故を起こしたこと、事故処理に数多くの犠牲があつたこと、政府による責任逃れの情報操作があつたこと、隠蔽によって不要に人々が被曝し、その影響は甚大であること、事故による影響は何世代にもわたって続くことを伝え、圧倒的な恐怖や悲惨さとともに教訓化しようとしていることが感じ取れる。

3節 追悼のためのスペース

最後の展示ホールはまるで教会のようであり、追悼のスペースと呼ぶにふさわしい。左右展示室を出



写真8 イコノスタシス



写真9 メインホール

て、ホール展示室の入口上の方には、またしても赤い斜線で消された村の標識が飾られ、木製のフレームは、立ち入り禁止となった教会のファサードである。“Est dolendi modus, non est timendi”というラテン語が書かれていて、「悲しみには限りがあるが、不安には限りがない」という意味だそうである。

門をくぐると、広い空間が広がるが、全体はやはり暗く、赤や青でライトアップしてある。中央の床には、事故を起こした原子炉の屋根が実物大で再現されている。象徴的表現で表されている空間の意味は、最初に対面するのが、イコノスタシス（聖なる空間を区切る壁のようなもので、格子組のパネルにアイコンがつけられている）であり（写真8）、炉心の部分に入ると、左には聖ガブリエル、右には防護服で、防護服は、事故当時旧ソ連の書記長だったミハイル・ゴルバチョフの名前と聖ミカエルがつながり、ロシア正教のシンボルと原発事故のイメージが

交差する仕組みだそう（東 2013）。

炉心中心部には、立ち入り禁止地区内で拾得したという木船とたくさんのぬいぐるみが置かれ、まるでゆりかごかノアの箱舟のようにも見える。天井には原子炉素材で世界地図が描かれ、原発所在地にランプが灯る。壁面のモニター背後には、4号機原子炉の屋根と同じデザインで並べられたたくさんの子どもたちの顔写真がある（写真9）。1986年、1987年に生まれたリクビダートルと避難者の子どもたちであり、たくさんのまなざしを感じる。脇には、ガスマスクと防護服を身に着けた3体の等身大人形が立ち、周囲には子どもたちの写真やおもちゃ、生活用品が並べられている。

建物を出たところにある小さな庭は、しばしベンチに腰を下ろし、展示から受け取ったメッセージや情報を反すうしながら、犠牲になった人々に祈りを捧げることができる空間となっている。心安らぐスピリチュアルな雰囲気であり、追悼の場として機能している。

4節 展示手法

チェルノブイリ・ミュージアムの特徴は、抽象度の高いアートを使った展示が行われていることだろう。これらをデザインしたアナトーリ・ハイダマカ（2013）は、感情と象徴性を重視した問題提起を行うのだという。子どもの頃の記憶やおとぎ話、民俗的な慣習と結びついた象徴による展示は、文化的背景を共有しない者には理解しにくい側面もあるが、圧倒的力でもって情緒的な揺さぶりをかける。実物の展示が多いことも特徴だろう。犠牲者のドキュメントや被災地から持ってきた物、放射能測定器や測定ゲート、診察に使われた道具や奇形動物の標本など、実物が生々しく身体感覚に訴えてくる効果がある。メインホールにあるノアの箱舟のように見えるボートとおもちゃも、すべて立ち入り禁止区域から持ってきた貴重な資料である。抽象度の高いアートも、素材の大半は被災を経験した証人としてのモノである。ただし、オーディオガイドは2時間ほどの内容で、かなりボリュームがあり、非常に充実している一方で、音声に気を取られていると、展示が

狙う情緒的反応に注意を向けることが難しく混乱する側面もある。

この博物館では、子ども向けの特別なプログラムや大学生向けの討論会なども催している。子どもたちはメインホールの原子炉を模したプレートの上に座り、原子力とは何か、さまざまなエネルギーを求めて生きた人間の軌跡について話し合い、アニメーションを見たり、クイズ形式のゲームを行ったりする。キエフの中高教育機関の教員との協働プログラムで、生態学や生命の安全、気候などをテーマにした講演、元事故処理員の講演なども開催する（コロレーヴスカ 2013）。また、この博物館は世界中の若者に愛され、近年ではデートスポットとしても人気を集めているとのことである。その理由は、展示の7割がアーティスティックで哲学的な問いかけを行う手法にあるという（津田 2013）。

5 節 立ち入り禁止地区のツアー

チェルノブイリ・ミュージアムでは、「キエフの国立チェルノブイリ博物館を訪問するだけでなく、悪化しているチェルノブイリ地区をご自身の目で見て、自然がどう人工物を乗り越えたかをご覧ください」と、パートナーツアー会社が紹介されている。立ち入り禁止地区の見学は 1990 年代半ばに始まった。当初はジャーナリストや専門家を対象としていたが、徐々に一般観光客にも門戸を開き、2019 年、ゼレンスキー大統領は、ここを観光施設として整備し、積極的に活用することを決定した。折しも、2019 年 5 月から 6 月にかけて放映されたアメリカのテレビドラマ「チェルノブイリ」が人気を博し、2015 年には 8 千人だった観光客が、2019 年 6 月段階で 10 万人と予測された。

チェルノブイリ地区はキエフから約 100 キロ、車で約 2 時間のところにある。ウクライナ政府がエリアを管理しているので、公式旅行会社のツアーに申し込まなければならない。立ち入り禁止区域の森は 126,000 ヘクタールあり、全部で 12 の検問所がある。ここから強制避難させられた人は 20 万人だったが、1 年で 1,500 人が戻った。現在、職員 7,000 人が働いている。30 キロの立ち入り禁止区



写真 10 ディチャートキ検問所



写真 11 石棺

域の境界にあるディチャートキ検問所には、「安全規則」を示す看板があった（写真 10）。アミューズメント・パークのような行動をしてはいけない、警備装置の撮影禁止、地域内で物に触ってはいけない、皮膚の露出は最小限に、屋外で飲食しないなどのルールである。

検問所で ID チェックを受け、カード式の線量計を受け取って首からぶら下げる。舗装された一本道を車で走ると、途中途中に、ミュージアムで見たような村の名前の入った標識がある。10 キロの検問所を過ぎ、廃墟となったコパチ村に残る幼稚園へ行った。車を止め、林の道を進むが、道からはずれると林の中は放射線量が高いとのこと、ガイドが線量計をあてると $5.6 \mu\text{Sv/h}$ だった。コパチ村から林を抜け、車でさらに進むと、冷却水供給のために作られた人工湖があり、巨大な冷却塔と建築途中だった 5 号機と 6 号機、錆びついた大きなクレー

ン車が何台もそのままの姿で残されていた。そこから2キロで事故のあった4号機である。2016年6月に完成した新石棺の前にあるモニュメントの前で車を降りると、新石棺の効果があったとのことで、 $0.56 \mu \text{ Sv/h}$ だった(写真11)。

もっとも原発に近い町プリピャチへ行く。プリピャチは、1970年、原発の建設と一緒に作られた人工都市で、原発関連の職員とその家族5万人が住んでいた。模範的な旧ソ連の都市とみなされ、充実したインフラを備えていた。開園直前に事故が起こり、一度も使われなかったという遊園地や、劇場、体育館、飛込台付きの大きなプール、カフェなどの廃墟を見学した。それから、原発で働く職員用の食堂で昼食をとる。チェルノブイリは、現在も送電施設および廃炉作業の拠点として機能しており、多くの職員が働いている。建物に入ったところに放射能測定器があり、全身をチェックしてから食堂に入る。多くの職員と観光客が当たり前のように同じ場所で食事をしていた。

チェルノブイリ市では、重機の広場、消防士の碑、船の墓場、教会を見学し、事故後25周年を記念して作られたというニガヨモギの星公園へ行った。入口には、ラッパを吹く大きな天使像がある。ヨハネの黙示録第8章10節に、「第三の天使…黒い天使はラッパを吹き鳴らす。それによりニガヨモギの星を川に落とし、地上の川の三分の一を毒にする」という文章があり、チェルノブイリの地名はウクライナ語でニガヨモギを意味するということで、事故を予言したものとされたそうだ。公園には村の標識が並ぶ「記憶の道」があり、「福島」の名づけられた広場には、折り鶴や”FUKUSIMA”という文字を象ったオブジェなどがあった。

その後、筆者らは、チェルノブイリの小さな商店で土産を買い、車でサマシオール(自主帰還者)の家を訪問した。60代くらいのカップルで、1年前にキエフから戻ってきたと言う。水色や緑のペンキで塗った小さな木造の家と花の咲き乱れる庭がメルヘンチックな雰囲気を醸し出し、事故前の村の様子を想像させる。テーブルには大量のご馳走が並べられ、自家製ウォッカがふるまわれた。一緒になった

別のガイドは、「世界最悪の町に来てくれて感謝する」と言い、サマシオールは、「今日のお客さんは笑顔で喜んでくれて嬉しい」と言った。楽しそうな家族写真、野菜やりんごが実る畑を見せてもらい、手作りウォッカとひまわりの種を土産にもらった。

Williams (2007) は、プリピャチの町はある意味で「生きたミュージアム」であり、不気味な歩く劇場であると言っている。整備された道を少しでもはずれたならば放射線量が一挙に高くなったり、「安全規則」はどうやら適用外らしいサマシオールの家での食事や手みやげは、訪問客を好奇心からやってきた単なる見物人に留めることなく、リスクのあるその土地に踏み入り、時空を共有する証人として巻き込む力を持っていた。

東(2019)は、チェルノブイリ・ツアーの魅力を哲学的体験としてのダークツーリズムに求める。実際、検問所の手前にあるみやげ店でガスマスクや防護服、マグカップやTシャツが売られていたり、ところどころに観光スポットと言える場所があつて、ガイドから「ここで記念撮影をします」と言われたり、観光客のいたずらで学校の机の上にガスマスクが置かれ、落書きがそのままにされていたりなど、複雑な気持ちになる場面も少なくなかった。これがチェルノブイリの現在なのである。

4章 福島ミュージアムは原発事故をどのように展示しているか

1節 伝承館による原発事故の展示

伝承館は、原発災害の記録と教訓を扱うことになっており、その展示は、「プロローグ」「災害の始まり」「原子力発電所事故直後の対応」「県民の想い」「長期化する原子力災害の影響」「復興への挑戦」から成る。

最初に、7面巨大スクリーンの映像で、原発が設置されて多くの雇用が生まれ、日本の高度経済成長と豊かさを支えてきたこと、地震・津波・原発事故が起こり、住民の避難を経て、復興に向かっているというナラティブが語られる。スロープ壁の年表で、

これまで国内外で原発事故（スリーマイル島、チェルノブイリ、東海村など）が起きたことを示すとともに、学校の教育プログラムによって原発に夢を託す子どもたちの作文や、かつて双葉町にあった「原子力明るい未来のエネルギー」の看板の写真パネルが展示されていた。

原発事故については、爆発の映像とともに現場の電話音声が開示されており、緊迫感が伝わってくる。事故直後の対応では、モニターで、東京電力の職員、オフサイトセンターや自治体で指揮に当たった人々の証言が見られる。たとえば、「高い放射線量の中、誰かが状況を確認しなければならず、自ら志願した人がいた」という証言があったが、その方がその後どうなったのかについては触れられていなかった。緊急時迅速放射能影響予測システム（System for Prediction of Environmental Emergency Dose Information：SPEEDI）については、「通信が不安定になり、情報が得られず、町民に不要な被曝をさせたことが悔しい」という内容の証言があった。展示されている情報の不正確さに問題はあがあるが、証言者たちの表情や声から、その心情が伝わってくる。また、どの自治体がどこへ避難するかを書き出したパネルや避難所で使われていた毛布などの実物展示からは、右往左往させられた人々の混沌とした状態が想像された。

映像では、県民の平穏な日常がどのように変化したのかの証言を聞くことができるが、特に印象深かったのは、語り部による口演である。南相馬市に住む三人の子どもを持つシングルマザーの女性で、何の情報もなく、どうしたらよいのか皆目見当もつかないなか、個人の判断で必死に逃げ回ったこと、一時的に家族が別れて暮らし、子どもが精神的な問題を抱えたこと、南相馬市に戻り家族で暮らす選択をしたこと、子どもに甲状腺嚢腫が見つかったが何度目かの検査でそれが消えたこと等々を語られた。原発事故後、実際にどんなことが起きるのかを具体的に知る貴重な機会であり、口演後に語り部を囲んで話をすることもできた。29名の語り部が登録されているということで、どのような経験をした語り部がいつ証言をするのかなどの情報は公開されてい

なかったが、問い合わせると教えてもらえる。語り部のなかには、いまだ避難されている方も含まれているようだ。遠方から原発災害を学びに来る者にとって、ここに来れば被災者の生の声を聴くことができるのはありがたい。

教訓とすべき、東電、国、行政の責任については扱われておらず、細かなところで事実確認や修正が必要だと思えるものもあった。たとえば、「避難所で配られた安定ヨウ素剤」が展示されていたが、実際に配布されたのはごく限られた避難所だけだったはずである。現在の放射線量の展示も、壁面には世界と福島県内の主要都市の放射線量が表示されており、福島ではいずれもかなり低い値となっていた。本ミュージアムを含む事故地周辺では、いまだ高い放射線量を示すところが少なくない。その場にいたスタッフに尋ねたところ、タッチパネルで探していくと、原子力規制委員会による放射線量分布マップにたどり着くことがわかったが、「長期化する原子力災害の影響」の展示としては、むしろこちらを壁面展示の方がふさわしいと思われる。長期化する影響を伝えるためには、時間を経て回復してきたこと以上に、回復には途方もなく長い時間がかかることを示す必要がある。

放射能のリスクについての展示が皆無であることは大きな問題だろう。原発事故を経験していない未来の世代がこれらの展示を見て、原発事故が単なる爆発事故とどう違うのかを理解することができるだろうか。人々がなぜ避難しなければならなかったのか、今なお帰還できない人々が大勢いるのはなぜなのか、おそらく放射能のリスクは暗黙の了解として扱われており、その了解の中身には人によって大きな差があると考えられる。一般市民にわかりやすく放射線のリスクを示したい。

他のミュージアムと違って、展示のすべてが撮影不可となっていることは残念である。ミュージアムを訪れた者が、そこで学んだことを身近な者に伝えようとする時、あやふやな記憶に頼るしかない。写真は、記憶と伝承に有用である。撮影可能にして、撮影不可のもののみ、理由とともに表記すればよいのではないだろうか。

2 節 コミュタン福島、環境再生プラザ、

リプルンふくしまによる原発事故の展示

これらの施設では、そもそも原発事故の継承は目的に挙げられておらず、その扱いはわずかである。

コミュタン福島は、「ふくしまの3.11から」「ふくしまの環境のいま」「放射線ラボ」「環境創造ラボ」「環境創造シアター」から構成されている。原発事故を扱っているのは「ふくしまの3.11から」だが、地震発生、津波、原発事故から現在に至るまでの経過が年表、映像、当時の新聞記事などで展示されている。センセーショナルな新聞の見出しから、照明の暗さと相まって、とてつもない事故が起きてしまったという当時の感覚が蘇るが、具体的な被害についてはあまり触れられていない。

その後の展示は、「3.11クロック」と名づけられた時計が、地震発生時刻から環境回復にかけてきた時間を示し、環境回復と創造を強調した展示となっている。放射線ラボ、環境創造ラボなど、ゲームで遊びながら放射線や内部被曝、除染などについて学ぶことができる。360度全方位がスクリーンとなったシアターでは、人類は昔から自然放射線の中で暮らしてきたこと、原発事故で放射性物質が放出されたため除染を行なっていることなどが語られ、福島の未来を明るく照らす光が表現されていた。

来館した子どもたちの感想カードには、「放射線のことをよく分かりました」「とても楽しかったです」「放射線とうまく関わっていきたいです」といった感想が並ぶ。「未来へのメッセージ」と名付けられた巨大なスクリーンには、「たのしかったー」「すばらしい」等の言葉が青や黄色のカラフルな文字で流れている。中2階にあるタッチパネルから、来館者自身が未来へ残したいメッセージを打つものだが、「福島の自然は美しい。原発は必要でしょうか」と打つと、「福島の自然は美しい」と表示され、「原発大丈夫ですか」と打つと、「原発大丈夫」と表示された。どのような基準でメッセージが取捨選択されているのか不明だが、来館者の言葉がそのまま映し出されるわけではない。もしも不安や疑問を訴えるメッセージを削除しているだけだとすれば、「県民の皆さまの不安や疑問に答える」という目的

を果たしているとは言えないだろう。

福島県民が環境の回復と創造への意識を深めることを目的としているためか、原発事故の記憶や教訓はほとんど扱われておらず、環境再生プラザやリプルンふくしまも同様に、汚染された土壌や廃棄物が生まれた原因である原発事故に関する説明はほとんどなく、環境の回復と復興のみに焦点を当てた展示となっていた。

3 節 廃炉資料館による原発事故の展示

廃炉資料館は、事故の反省と教訓を後世に残すことを掲げているだけあって、事故の状況や教訓について大きく扱っている。2階の「記憶と記録・反省と教訓」の展示スペースでは、シアターホールで上映される映像による事故のお詫びから始まる。「原発は地震には耐えたが、津波によって電力が全て止まり、事故が起きてしまった。しかし、事故を天災と片付けてはならない。事故によって多くの人に迷惑をかけたこと、原発は安全だと過信していたことを深く反省している。その上で、福島復興と廃炉に全力で取り組む」とし、廃炉作業の複雑な工程を示している。12分間の映像を見終える頃には、難しい廃炉作業に取り組む者たちを応援したくなるような気持ちにさせられる。

このゾーンでは、事故の基本情報、地震発生から電源復旧までの11日間、1～4号機の事象、全電源を喪失した1・2号機中央制御室の事故当時の様子を、地震発生から電源復旧までの福島第二原発の対応と経過をパネルや最新型の電子機器を使って解説している。そして、反省と教訓として、「防ぐことのできなかつた事故の事実」に正面から向き合い、「昨日より今日、今日より明日の安全レベルを高めてまいります」という。ほとんどの展示は撮影可であったが、反省と教訓の映像モニターは撮影不可だった。注意深く聞くと、映像モニターの締めくくりに、「比類なき安全を創造し続けることを、ここに決意いたします」と映し出され、音声では「比類なき安全を創造し続ける原子力事業者になることを、ここに決意いたします」と述べられていた。原子力事業者であることに恥や葛藤があるのだろうか

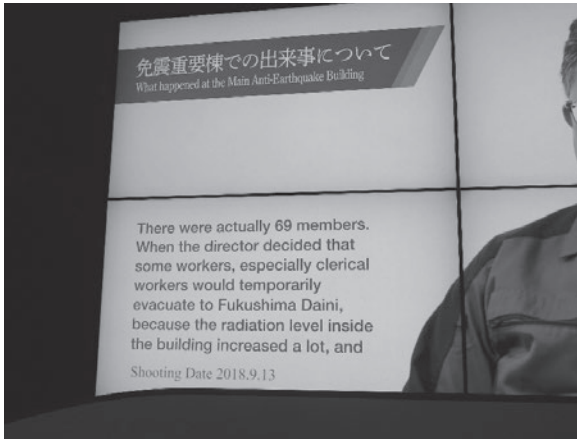


写真 12 あの日、3.11 から今

と余計な勘繰りを入れたくなる。お詫びと反省が繰り返されるが、具体的な問題点は語られず、何がどんなふうに変更されたのかは見えてこない。

もっとも印象深いのは、「あの日、3.11 から今」という原発で事故対応にあたった職員が実名で思いを語る映像展示である（写真 12）。そこでは、事故後無事だったと手を取り合って喜んだのも束の間、自分たちが信じられない放射線量の中にいること、誰もが志願して現場に残ったこと、事故を次の世代の職員へ伝えていかないといけないこと等々が語られていた¹⁸⁾。登場する職員たちの表情からも悲痛な状況が伝わってくる。

現場の事故当時の様子がある程度理解することができ、そこに関わった人々の顔を見ることもできたが、事故処理の過程で犠牲になった人はいるのか、被曝によって後に亡くなった人はいるのかなど高濃度放射線の健康への影響などについてはまったく触れられていない。1階は廃炉現場に関する展示となっており、廃炉までの道のりは遠く困難な作業が続いているが、安全に配慮しながら必死に取り組んでいるということを感じさせるものだった。廃炉資料館は、高度な科学技術を使用した技術的な説明と同時に、見る者の心情に訴える展示となっていた。

4 節 原発災害情報センターによる原発事故の展示

民間のミュージアムである原発災害情報センターでは、玄関を入ったところに、「原発から出る／核のゴミと／そこに生じる／放射能は／子供や孫の代



写真 13 原発災害情報センター内の様子

まで／に止まらず／百万年消える／事はない」と書かれた大きな書が壁一面に掛けられている。また、センター周辺の空間放射線量、「311 甲状腺がん患者の会」の案内、「3・11 甲状腺がん子ども基金」の新聞広告が貼られていた。手作りのちらしには、事故後に自殺が増え、「私はお墓に避難します」「福島野菜はもうだめだ」と悲痛な言葉を残していることや、事故から5年の間に、福島県内の小児甲状腺がんが急増していること、「ニコニコしていれば放射能は安全」と専門家が述べていたことも提示されていた。さらに進むと、写真パネルによる展示が続く（写真 13）。

今中哲二監修、2006年4月製作、原子力資料情報室提供のチェルノブイリ原発事故の展示があり、チェルノブイリと福島の避難基準の比較表もあった。1991年に成立したチェルノブイリ法では、年間5mSv以上の放射線量の地域は、強制避難区域に指定されている。一方の福島は、年間20mSv以下は早期の帰還を促している区域、年間20～50mSvは除染して数年で帰還を目指す区域となっている¹⁹⁾。原発事故後の居住について、両国の考え方の違いが見て取れる。

双葉町の看板、避難で大渋滞になっている道路、2015年に上空から撮影された富岡海岸を埋め尽くす汚染土の入ったフレコンバック、自殺した酪農家が堆肥舎の壁に残した「原発さえなければ」という言葉などの写真もあった。フレコンバックや除染作業の防護服は、実物展示されていた（写真 14）。



写真 14 フレコンバッグと防護服

「とまったままの時計事故後7年をへて」という展示では、画鋸で留められた解説に、「原発から半径4km圏内の帰還困難区域の家にあった時計。いつ止まったのかは分からない。四季折々の恵みを受けながら人の営みを育んだ古里。いまだにこの時計と同じく止まったままである」とあった。帰れない人々の時間も止まってしまっていることが感じられ、何とも言えない気持ちにさせられる。

他のミュージアムには見えにくい原発事故に関する拭い去ることのできない否定的影響が率直に展示されている。展示内容の幅や手法にさらなる工夫を期待したい。

5 節 「生きたミュージアム」の可能性

上述したように、チェルノブイリ原発事故にとって、30キロ圏内の立ち入り禁止区域のツアーを、「生きたミュージアム」であるとするならば、これを福島で考えるとどうなるであろうか。チェルノブイリ・ミュージアムは、事故を起こした原発から100キロほど離れたところにあり、チェルノブイリ・ツアーは、立ち入り禁止区域となっている30キロ圏内に、安全管理しながら入るというものである。ミュージアムの来館者が展示物を見るのと違って、ツアーは、今なお大量の放射能を含む廃墟となった場所に自ら身を置き、原発事故の影響と直に触れ、それを生きることになる。

思い返してみれば、福島でも、避難解除される前の居住制限区域や避難指示解除準備区域に入り、立

ち入り禁止のバリケードや延々と続く除染作業とフレコンバッグの山を眼にし、事故後も避難指示区域に住み続けた人々と出会い、話を聞くことは、「生きたミュージアム」と言えるような体験だった。2017年12月、避難解除されて間もない浪江町請戸地区の海岸で車を降りると、津波の被害にあった家屋の跡が残り、雑草が生い茂り、人の気配はなく、遠くに福島第一原発が見えた。2011年、2012年に東北沿岸部でよく見かけた光景だったが、私たちは、時間とともにそれが変化し、新しい町ができ、人々が生活する様子を見てきた。避難解除されたばかりの場所では、完全に時間が止まっていたのだ。小高い丘にある共同墓地には、作られたばかりの真新しい慰霊碑があり、死者・行方不明者182名の名前が刻まれていた。津波被災者のなかには、原発事故で立ち入り禁止となったために救助されなかった命があったと聞いた。時折ゴオゴオという風の音が耳に響き、失うとはこういうことなのだと言ってくる。原発事故の痛みを肌で感じた体験だった。

現在、伝承館は事故を起こした福島第一原発から3キロにあり、2020年3月に先行的に避難解除された場所である。解除されたのは全町の5%弱であり、住民は誰も帰っていない。わざわざ立ち入り禁止区域まで行かなくとも、ミュージアムそのものが生きた場所にあり、周辺を歩くことができれば、まさに生きたミュージアムになる。ただし、その場所の意味づけは違う。チェルノブイリは、30年以上経っても依然として放射線量が高い場所があり、安全管理のもとでのみツアーが可能だが、福島の方は、除染によって生活するに安全であるということになっている。しかし、避難解除された多くの場所において、線量計をもって少し動き回ると、事故前から20倍になった新たな基準値から見ても高い線量を示す場所は少なくなく、それはちょうど、チェルノブイリ・ツアーで経験したことである。30年を経ても、大きな相違はないのだ。

水俣では、考証館が地域全体をエコミュージアムと想定し、フィールドワークの拠点としての役割を担っている。筆者も参加したことがあるが、水俣病の歴史に関連した場所や、環境に関連する地域おこ

しの取り組みが行われる場所へと案内し、水俣病の意味や地域との多様な関係を考えさせるものである。福島においても、同様の考え方は可能であろう。ただし、「生きたミュージアム」の訪問者にとって、案内人は欠かせない。筆者らは、これまで、被災者や、福島の状況に詳しいジャーナリストやNPOの方々に案内人となってもらってきた²⁰⁾。もしも「生きたミュージアム」の可能性を追求するとすれば、誰がどのような目的でどのようにツアーを企画するのか、負の遺産に対する高い倫理観が求められるものである。

5章 ミュージアムは原発事故の記憶をどのように扱っているか

本章では、ミュージアムが作り出す記憶について論じるが、具体的な論点を表2に提示する。

1節 原発事故について

チェルノブイリと福島のミュージアムの展示を紹介してきたが、それぞれのミュージアムが原発事故の記憶をどのように扱っているのかを見ていくこととする。

チェルノブイリ・ミュージアムでは、ひとりひとりの顔が見え、事故に巻き込まれてしまった人々の小さな物語が多声的に聞こえてくる。質素で淡々とした雰囲気からは、かえって事故の不気味さを感じられる。これだけの事態が起きていたのに、連邦政府によって事故は隠蔽され、被害は大きくなった。

これらの展示は、致命的な放射線被害をもたらす原発事故の悲惨さとともに、時の権力が国民に対して誠実でなかったことを批判しており、事実が共有されることがいかに大事であるかという集合的記憶を作り出している。そのためなのか、チェルノブイリ・ミュージアムの展示はとても細かく、事故当時のことを一つも漏らしたくないようにも見える。

福島の伝承館は、現場の作業員、危機対応にあたった行政職員、情報もなく恐怖と混乱のまま避難させられた被災者など、複数の立場から原発事故の衝撃を伝えている。放射線のリスクに関する具体的情報はない。目に見えない放射線は高濃度で浴びると死に至ること、低濃度でも長期間浴び続ければさまざまな健康被害が起こること、こういった説明がないままでは、原子力災害の記憶と教訓を引き出せないのではないだろうか。

廃炉資料館は、原発事故当時について詳細に展示している。事故発生時の混乱の中、スタッフたちは決死の覚悟で対応にあたっていた。事故対応にあたったスタッフの生の声は、どこかヒーロー性を帯び、見る者の胸を打つ。リクビダートルたちが国の命令で事故対応にあたったのに対し、一電力会社の社員たちが、使命感から事故に対応したのである。しかし、一番気になる殉死された方はいなかったのか、その後、健康被害や障害などに苦しんでいる人はいないのかなどについてはまったく触れられていない。実際には、被ばくによる癌で労災認定された作業員たちがいる。お詫びと反省の展示が繰り返されることで、見る者は、東電も努力してきたのだと感じるかもしれない。心情に訴えつつ、東京電力の

表2 チェルノブイリ博物館と福島のミュージアムが作り出す記憶

	チェルノブイリ・ミュージアム	福島のミュージアム
原発事故について	被害者の顔が見える。権力によって事故が隠蔽されたことを批判している。	伝承館と廃炉資料館で事故について扱っているが、放射線のリスクや健康被害などの視点が抜けている。
喪失か回復か	喪失のみを扱い回復の物語はない。	喪失がほとんど扱われず、いち早く回復の物語が作られている。
人類に普遍的なテーマとして	原発事故を核の連続体として位置づけ、世界共通のテーマとしている。	福島の独自性を強調している。
当事者性を問う	おもに被害者について扱う。	伝承館などで被害者について扱い、廃炉資料館では加害者について扱う。

懸命な取り組みという集合的記憶を作り出そうとしているように見える。

2節 喪失か回復か

チェルノブイリ・ミュージアムでは、原発事故による喪失を可視化し、悼むことが重視されている。リクビダートルや被災した子どもたちの顔写真は、彼らがたどった人生を想像させる。一人ひとりの名前は知らなくても、生身の人間が確かに存在し、放射線にさらされてきたのだと実感する。住めなくなった村々の名前は、先祖から受け継いできた土地を離れ、継承してきた文化も途絶えた悲しみを訴えている。厳粛な雰囲気からは、事故によって、どれほど多くのものが失われたのかが痛いほど伝わってくる。チェルノブイリ・ミュージアムでは喪失の記憶が創出され、回復や復興に関しての展示はない。事故の影響は世代を越え、復興には気の遠くなるような長い時間がかかることが示されている。しかし、来館者がチェルノブイリで起きた大きな痛みを寄り添う気持ちを持つには、十分な空間である。そして、人は喪失の事実と向き合うことから、回復の物語へ一步踏み出すことができる。

福島ミュージアムでは、喪失はほとんど扱われていない。コミュタン福島やリプルンふくしまなど、愛称で呼ばれる施設は、原発事故による喪失のイメージからは程遠く、廃炉資料館も喪失は扱っていない。伝承館はかろうじて震災関連死の人数を表記していたが、数字から、どのような経緯で亡くなったのか具体的に想像することは難しい。福島での震災関連死は2,286人、全国3,739人の6割を超え（復興庁2019年9月30日現在）、関連自殺が118人、全国240人の約半数である（厚生労働省2020年8月現在）。被曝による健康被害や死についての情報もない。モニターでの証言や語り部の語りからは、かつての生活を失った方たちの姿が見えてくるが、今なお故郷に帰ることができず、避難生活を送りながら、住宅提供を打ち切れ、生活に困難を抱え苦しむ人々の存在はごっそり抜け落ちている。そしてまた、被災者は福島県民にだけではないことも指摘しておきたい。

たくさんの人々が故郷を失い、コミュニティを失い、先祖たちとのつながりを失い、歴史を失い、思い出を失った。福島の人々だけではない。毎年、福島を訪れるたびに、その美しく豊かな自然に圧倒され、私たちが失ったものがかけがえないものだったことに胸がつぶれる思いがする。避難解除されたことで、これらは戻ってきたと言えるのだろうか。たとえば、きれいに整備された飯舘村の町役場の記念碑の前の放射線量は0.23 μ Sv/hだったが、脇の植え込みは0.46 μ Sv/hだった（2018年12月）。美しい山々はどうかだろう。安心や信頼といったものも消えてしまった。膨大な喪失や痛みを無視して、これらのミュージアムは性急に、あるいは強引に回復の記憶を作り出そうとしているように見える。コミュタン福島、環境再生プラザ、リプルンふくしま、廃炉資料館を合わせて見学すると、原発事故発生から除染、汚染土の埋め立て、原発の廃炉という一連の流れが顕現し、環境回復の物語が強化されていく。強力な力でもって未来の記憶を誘導されているかのようにも感じられる。

福島で唯一、喪失を扱っているのは、原発災害情報センターである。原発事故によって自殺した酪農家を取り上げており、事故による最大の被害者の声を残そうとしている。他のミュージアムが、回復の物語へいち早く進もうとするなか、市民によるミュージアムがかき消されてしまいそうな声を拾っていることは貴重である。

3節 人類に普遍的なテーマとして

チェルノブイリ・ミュージアムでは、チェルノブイリの教訓を世界の次世代に警告するという目的に沿って、多言語での音声解説を用意しながら、繰り返された悲劇を共に抱え、連帯しようとする姿勢が見られる。広島・長崎への言及に加え、福島の原発事故と人々の苦悩が詳細に描かれているという意味では、福島の原発事故を原爆やチェルノブイリなど核被害としての連続体に位置づけ、原発事故を人類に普遍的なもののだと警告している。ホールには、最初の10日間に放射性物質を含んだ雲（プルーム）がどんなふうにとどこまで流れていったかが、時間経

過とともにわかりやすい動画で展示されていた。また、ホールの天井には原子炉素材で世界地図が描かれ、原発所在地にランプが灯っていた。

伝承館は、チェルノブイリ、その他の原発事故について表記しているものの、「福島だけが経験した原子力災害」「福島にしかない原子力災害の経験や教訓」と福島の独自性を強調する。福島の独自性とは複合大災害というところにあるらしい。廃炉資料館においても、そもそもの原因は地震と津波にあるということ的前提に、自然を侮っていたことを反省するという姿勢がとられている。原発事故や放射線の問題を福島に閉じ込め、国内はもとより国外へも不可逆的な大きな被害を与えたことから目を逸らせ、チェルノブイリや他の被害との比較や関連づけをさせないことにつながるのではないかと危惧される。

福島にあるミュージアムでは、チェルノブイリ・ミュージアムが「文明と地球を危険にさらした科学技術」と表現するように、ひとたび事故が起きれば国境を越え、地球規模の放射線災害が起きることを隠蔽している。地球という視点はおろか、日本国内という視点よりもさらに小さい福島を語る展示ばかりである。

4 節 当事者性を問う

原発事故には、原発の安全性を過信して爆発を招いてしまった加害者と、放射線の影響から避難を余儀なくされたり、生業を止めざるをえなかったりした被害者がいる。チェルノブイリ・ミュージアムや原発災害情報センターは、おもに被害者の記憶を扱っており、廃炉資料館は、加害者の記憶を扱っている。コミュタン福島やリプルンふくしまには、当事者の姿は感じられず、人と環境とを分け、環境回復のみを取り上げる。

伝承館では、語り部やモニターの証言から、被害者の記憶と加害者の記憶が扱われている。スタッフとの会話では、最初の映像は来館者が展示を自分事として受け取れることを意図しているが、まだ不十分だと感じており、県民の想いのコーナーでもっと工夫できないかと考えているとのことだった。伝承館が当事者性を重視していることは重要であり、今

後に期待したい。

しかし、原発事故の当事者は、加害者である東電や国と放射線の影響を受けた被害者だけなのだろうか。原発による利益を受け取っているのは、都心に暮らす人々である。前田（2020）は、エネルギーを遠隔地から調達しオフショア化することで、万が一事故が起きても被害は事故地周辺にとどめることができる一方、エネルギー自給に対する当事者意識が育たないと指摘している。高橋（2012）は、誰かの生活が誰かの犠牲から利益を上げるメカニズムのなかに組み込まれているこのようなあり方を「犠牲のシステム」と呼んだ。原発が私たちの生活に欠かせない電気を作り出すためのものである以上、実は誰もが当事者なのである。そのような意味で、来館者の当事者性を刺激するような展示は見つからない。

6 章 フォーラムとしてのミュージアムに向けて

1 節 さまざまに創出される集合的記憶

同じ事案を主題としながら、別々の場所で別々の集合的記憶が作られていく事例は、水俣病（平井 2015）や三池炭鉱（松浦 2018）でも報告されている。小児科医である山田（2014）は、森永ヒ素ミルク中毒事件、水俣病、原爆、ビキニ海域水爆実験、福島原発事故において、企業や政府、専門家が被害をどのように扱っていくかという歴史的経過を比較し、原発事故も公害の経験から学べることを説得してみせる。ミュージアムについても同様のことが言えるだろう。

水俣病は、日本窒素肥料株式会社（現チッソ）が工場から水俣湾に流し続けた有機水銀が原因で神経障害等が発生したもので、1950年代から原因不明の症状が訴えられるようになり、1956年に公式確認された。被害者と企業、行政との対立とともに、地域の分断が起こり、不知火沿岸漁民と原因を認めず抜本的な対策を講じない行政や企業との対立が顕在化した。水俣市は、1990年、環境創造みなまた推進事業に着手、水俣病の教訓を活かした環境都市

への取り組みをスタートさせた。水俣病市立資料館は、水俣病の教訓を継承するために、1993年、国の補助を受け、総額6億1千万円をかけて建設された。1996年には水俣病犠牲者への慰霊・鎮魂、災禍を繰り返さないことを祈念する場として水俣メモリアル、2001年に水俣病情報発信の場として国立水俣病情報センターが完成し、2006年には水俣病の原点の地である水俣湾埋立地（エコパーク水俣）に水俣病慰霊の碑が建立された。

これに対し、水俣病被害者の支援を行うNGOによって運営される考証館は、これに先立つ1988年、「水俣病事件を歴史的に捉え、私たちの生きている時代を、水俣病を通して検証しよう」というところから、「考え証し続ける館」と名づけられて開館した。社会運動の媒体としても機能している（永野、2018）。平井（2015）は、「水俣病を扱うこれらふたつのミュージアムを比較し、それらが互いに対抗し合い、ある意味で相補的關係にあるため、両者を比べることによって、水俣病についてのより重層的、多角的な意味を学ぶことができる。そのうえで、より影響力が大きく権力を持つ行政は、地域の分断の解決に資するうえでも、格別の謙虚さと敏感さをもって被害者の声に耳を傾けるべきである」と指摘する。

水俣病を扱うミュージアムと同様に、福島ミュージアムでも、ミュージアムの主体が誰なのかによって、それぞれ別の集合的記憶が作られている。国や福島県が設置したミュージアムは、放射線被害からの環境回復の記憶を創出し、廃炉資料館は、原発事故への懸命な対応、お詫びと反省という記憶を作り出す。そして被害者が主体となる原発災害情報センターは、放射線被害の詳細な記憶を残そうとしている。

2節 フォーラムとしてのミュージアムをつくる

ミュージアム研究者であるDuncan（2012）は、「フォーラムとしてのミュージアム」を提起し、いまだ合意も定説も存在しない出来事やテーマに対して、ひとつの権威ある声に収斂することなく、多様で個性を帯びた複数の声を聴かせ、問題を複数の視

点から提示することで多様な声と議論が可能なミュージアムが求められているとする。

原発事故処理にあたった消防士をたたえる小さな写真展から始まったチェルノブイリ・ミュージアムは、今では原発事故を人類普遍のテーマへと昇華させ、世界へ発信している。世界中から訪れる来館者は、原発事故が起きてはならないものだと感じ、自国のエネルギー政策について、または電気を消費する自身の生活について考えを巡らせるかもしれない。あるいは、国家権力が情報を隠蔽する可能性にも注意深くなるかもしれない。チェルノブイリ・ミュージアムは、来館者に原発に対する当事者としての自覚を促し、多様な議論が展開される場となっている。長い時間をかけて、フォーラムとしてのミュージアムに醸成されてきたと言えるだろう。

伝承館はオープンして間もなく、まだ発展途上にある。たとえば双葉町にあった看板の実物展示がまだ実現されていないこと、語り部の語りにどの程度の制限やコントロールが加えられているのかなど、マスコミやネット上で、さまざまな意見が飛び交っていたが、筆者らは、語り部の話を聞いた後、来館者と直接対話することができ、スタッフに疑問をぶつけることができたことを評価している。今後、市民の疑問に答え、市民の声を積極的に展示に取り入れていく努力が求められる。チェルノブイリ・ミュージアムでは、市民から持ち込まれた企画を積極的に取り入れていた。たとえば、「福島への祈り」は、ウクライナに住む日本人がミュージアムに呼びかけ、実行委員会を作って、寄付や展示物を公募して実現されたものだった。「ウクライナから福島連帯の起き上がりこぼし展」は、パリで活躍するデザイナー高田賢三が呼びかけ人となり、広島市の平和公園に世界中から送られた折り鶴の再生紙を使って、会津で作られた無地の起き上がりこぼしに世界中のアーティストが絵付けしたものを展示するという企画だった。市民からの声を大切にして、積極的に展示へ反映していくことができれば、原発事故で失われた行政に対する不信感を減じることにも役立つだろう。

公的なミュージアムには、公平性の観点から、被

害者、加害者双方の多声的な展示が求められる。公的なミュージアムには権威が付与され、そこで創出される記憶は公共的記憶として認識されていく。松浦（2018）は、集会的記憶と公共的記憶を区別し、前者を特定の社会集団が共有する記憶、後者を社会全体にかかわる記憶であるとする。公共圏は複数の意見が向かい合うひとつの場であり、公共的記憶とはさまざまな遠近法と側面が共存する共通の記憶である。福島の公共的記憶が、原発事故を「福島で起きた福島の問題で、福島で解決していく」というものであれば、来館者の当事者性は育たず、福島と福島以外の地という分断が生じていく。さらに、原発事故を福島だけの問題だと限定すれば、福島の実態回復という大きな物語にまとめられ、そこに回収されない声はかき消されてしまう。

集会的記憶を固定化させる働きをするのがミュージアムであり、その展示をたえず刷新し、別の視点から記憶に向き合うことを促すのもまたミュージアムだと指摘する竹沢（2015）にならい、福島のミュージアムに対して働きかけ、フォーラムとしてのミュージアムを作り上げていくことが重要であろう。

3節 福島のミュージアムの課題と期待

時間をかけてフォーラムを作り上げてきたチェルノブイリ・ミュージアムに学びながら、期待をこめて、福島でもフォーラムとしてのミュージアムを作るための提案をしたい。

第1に、原発事故について公式に明らかになった事実を隠すことなく展示し、更新していくことである。事故については、国会、政府、東電、民間による4つの事故調査・検証委員会の報告書（以後、事故調と省略）があるが、共通するのは、原因の究明がはっきりしないこと、誰が事故の責任をとるべきなのか、責任の追及がいっさいされていないことである（日本科学技術ジャーナリスト会議、2013a；日本科学技術ジャーナリスト会議、2013b）。そのような状態では教訓もあり得ず、各地で原発が再稼働していることは大きな問題と言える。それでも、公的ミュージアムでは、国会や政府の事故調を

展示できるのではないか。たとえば、国会事故調が、事故の原因を人災と明確にした意義は大きい。さらに、その後の経過のなかで、公式の認証が重ねられている。情報が錯そうするなかで、ファクト・チェックを行い、わかりやすく公式に認められた事実を展示し、情報を随時更新していく必要がある。

2018年5月、原発事故の実態をできる限り事実即して伝えるメディアとして“Level 7”²¹⁾が立ち上がり、行政文書や統計データ、文献等、複数の物証の分析などを通して、メディアから排除されている被災者や関係者の声を可視化し、東電原発事故の実態を社会化しようとしている。公的なミュージアムこそ、このような姿勢が求められるだろう²²⁾。原発事故の扱いはエネルギー政策と密接に結びつくため展示が難しいと思われるかもしれないが、ウクライナは原発推進国であり原発との共存を前提にしている²³⁾からこそ、その破壊的影響を強調している。

第2に、回復や復興に重点を置くのではなく、原発事故による被害、すなわち放射線の影響をわかりやすく展示する必要がある。現在の展示では、放射線が人間の健康や生態系に与える否定的影響を過小評価し、隠蔽しているように見える。専門家によって諸説あるとしても、素人である一般市民に対して、事実として言えることをシンプルに提示し、意見の分かれることについては、その幅を含めた展示をすることができるだろう。

第3に、被害者の喪失や痛みが十分に理解できるような展示を行い、追悼のための空間を用意することである。現状では、復興と回復の物語を強調することで、事故による影響は過去のもののように扱われてしまっている。今なお続く、あるいはさらに増大している喪失や痛みにも光をあてなければならない。とくに、健康への不安、故郷に帰ることのできないまま支援を得られず、あるいは打ち切られ、不可視化されている避難者への視点も重要である。クラインマンら（2011）は、他者の痛みを認知できないことは、政治的虐待の文化的プロセスの根底にあるとしている。原発事故による被害や喪失や痛みを取り上げないミュージアムであるとするれば、来

館者が多ければ多いほど、被害者の痛みは集合的記憶から排除され、被害者の尊厳を奪い、その存在を消し去ってしまうことになる。喪失や痛みが感じられるような展示手法を工夫したうえで、それらを分有した来館者が追悼することのできる空間が欲しい。現在、伝承館の周囲に整備されつつある祈念公園に期待したい。

第4は、原発事故を福島のみの問題にするのではなく、人類に普遍的なテーマとして提示することである。原発事故による被害はひとつの県、ひとつの国に留まらないこと、世界中の人々に関わるものであり、生態系にも影響を与えること、現在だけでなく何世代にもわたること、全国、あるいは世界中に原発があり、どこで事故が起こるかわからないこと、原子力とはすなわち核のことであり、核兵器実験による被曝、核兵器とも結びついていることも示唆したい。

第5は、来館者の当事者性に働きかけ、自分の問題として理解できるように促すことである。原発によってできる電力がどのように使われているのかが見えるようにしたい。合わせて、原発が誘致されるにあたって、反対運動を繰り広げた人々の存在についても言及してはどうだろうか。さまざまな声があったところで、私たちの社会が選択したこと、その選択に自分たちは無関係でないことが理解できれば、当事者として原発事故に向き合うことができるだろう。次の世代には、自分だったらどうするのかを問いかけることができる。

第6として、ミュージアムにコミュニケーション・スペースを作ることを提案する。展示を見た人々が、感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことを他の来館者と語り合い、分かち合うことを可能にするのである。筆者らが伝承館を訪問した時には、立ち話ではあったが、たまたま一緒になった来館者やスタッフと話し合うことができたことは、大変有意義であり、満足度が高まった。

筆者らは、上記の6つの提案をとくに公立のミュージアムである伝承館に求めるものであるが、第7として、主体の違う複数の個性あるミュージアムがゆるやかにネットワークし、それぞれを見比

べることで、特定の視点を相対化したり批判したりしていけるようなミュージアムの複合体を作っていくことを提案したい。公的なミュージアムは、それ以外のミュージアムを支援しつつ、国際的な交流やシンポジウムなどを主催することで、対話と交流を促進するのである。水俣病のミュージアムについて論じた平井(2015)に倣い、それには、福島の原発事故はそれを受けとめる人々や社会状況の変化によって常に新しい意味を帯び続けていくという意味において「福島は終わらない」と認識することが欠かせないことを付け加えておきたい。

7章 おわりに

ハーマン(1999)は、トラウマに遭遇した人は、周囲がトラウマのストーリーに共感的、支持的に耳を傾ければ回復へと向かうことができるが、敵意に満ちた言葉をかけられたり関心を持ってもらえなかったりすれば、それが新たな傷つきとなると述べている。原発事故から十年が経とうとしているが、この間私たちはどれほど当事者意識を持ちながら、福島へ関心を寄せてきただろうか。東京オリンピック誘致の際、日本の首相が述べた「全て制御できている」という言葉は、除染すら完了していない福島や大きな被害を被っているそれ以外の場所の人々を傷つけ、人権を踏みにじってはいなかっただろうか。

原発事故に二度目、三度目があるとはならない。そのためには知恵を絞り、議論を展開するフォーラムが必要であり、ミュージアムはその役割を担う重要なインフラのひとつである。フォーラムとしてのミュージアムでは、多様な当事者が声を上げ、多様な人々を含みこむことのできる集合的記憶が構築されていく。そして来館者をも当事者として巻き込み、この記憶に主体的に向き合うことを求める。この動きは留まることのない生きたプロセスである。原発事故という災厄の前に、私たちは分断するのではなく、当事者同士として対話し、連帯を深めて行動したい。それは、未来で生きる人たちへも継承できる姿になるだろう。

最後になったが、筆者らは臨床心理学を専門にし、原子力災害や放射能被害等について、また博物館学についても門外漢である。もしかすると、理解が不十分だったり、誤った理解をしているところもあるかもしれない。原発事故という集合的記憶を公共的に扱うミュージアムとしてよりよいものにしていくために、多領域から声をあげていきたく、批判や助言を乞いたい。

【注】

1) 震災伝承施設

<http://www.thr.mlit.go.jp/sinsaidensyou/sisetsu/facility/>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

2) この内容は、後藤忍(2018年)「チェルノブイリ博物館とコミユタン福島」の展示を比較して～教訓の継承、放射線教育、人権教育の視点から」『「コミユタン福島」は3.11以降の福島をどう伝えているか』(フクシマ・アクション・プロジェクト)にまとめられている。貴重なお話を聞かせて頂き、あらためて後藤忍氏に感謝申し上げます。

3) 国立チェルノブイリ博物館 HP

<http://chornobylmuseum.kiev.ua/ja/about-us-2/>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

4) 東日本大震災・原子力災害伝承館 HP

<https://www.fipo.or.jp/lore>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

5) 最終訪問日 2020年9月24日。

6) 福島県環境創造センター交流棟 HP

https://www.com-fukushima.jp/about_us/comutan.html

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

7) 最終訪問日 2018年11月29日。

8) 1)と同じ。

9) 環境再生プラザ HP

<http://josen.env.go.jp/plaza/about/>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

10) 特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま HP

http://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/reprun/whats_reprun/

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

11) 最終訪問日 2019年12月5日。

12) 東京電力廃炉資料館パンフレット

https://www.tepco.co.jp/fukushima_hq/decommissioning_ac/pdf/leaflet-j.pdf

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

13) 最終訪問日 2019年12月5日。

14) 原発災害情報センター HP

<http://genpatusaigai.web.fc2.com/summary/index.html>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

15) 最終訪問日 2018年11月29日。

16) 国立チェルノブイリ博物館 HP は、英語、ロシア語、ウクライナ語、日本語からなり、それぞれで情報量が異なっている。ここでは、各国語に自動翻訳をかけ、情報を総合した。

国立チェルノブイリ博物館 HP

<http://chornobylmuseum.kiev.ua/en/category/exhibitions/>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

17) BBC NEWS JAPAN 2019年4月26日。

18) ノンフィクションではないにせよ、2020年3月に公開された映画「Fukushima 50」は、原発事故後に生死をかけて対応した職員たちの緊迫した様子を初めて明らかにした。しかし、2019年5月から6月にかけてアメリカのテレビドラマとして放映され、大きな話題を呼んだ「チェルノブイリ」と比較すると、ここでも健康被害には一切触れられておらず、悲惨な事故と苦労の後の事後処理の成功、着実な復興など、廃炉資料館と同じ物語が採用されていた。

19) 福島県 HP によると、この基準は2012年4月1日に設けられた。その後も避難指示区域は変遷し、2020年3月10日時点での帰還困難区域は、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、南相馬市、葛尾村、飯館村のそれぞれ一部となっている。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

20) これまでお世話になった藍原寛子さん、特定非営利活動法人ふくしま地球市民発信所(福伝)はじめ、貴重な学びを頂きましたみなさまに心より御礼申し上げます。

21) Level 7 HP

<https://level7online.jp/about/>

(最終閲覧日 2020年9月30日)。

22) 廃炉資料館は、過ちを複数の要因に分析して見せるが、抽象的内容に留まり、過ちが二度と起こらないよう具体的にどのような手立てがとられているのかが見えない。

23) ウクライナは今なお原発政策をとり、世界の中でフランスに次いで高い原発依存度となっている。チェルノブイリ原発での発電は2000年に停止されたが、それ以外の4箇所の原発で15の原子炉が稼働している。ウクライナはロシアから天然ガスおよび石油を輸入してエネルギー需要を賄ってきた経過があり、できるだけロシアに依存しないためには原発がはずせないと考えられている。

参考文献

馬場朝子・尾松亮『原発事故 国家はどう責任を負ったか ウクライナとチェルノブイリ法』、東洋書店新社、2016年。

Duncan, F. C. 'The Museum, a Temple or the Forum'. In Anderson, G. "Reinventing the Museum. 2nd Edition" ALTAMIRA Press, 2012.

後藤忍「福島県環境創造センター交流棟の展示説明文の内容分析」、

『福島大学地域創造』第28巻第2号、2017年、27～41頁。

後藤忍「チェルノブイリ博物館とコミュタン福島の展示を比較して～教訓の警鐘、放射線教育、人権教育の観点から～」、『「コミュタン福島」は3.11以降の福島をどう伝えているか』、フクシマ・アクション・プロジェクト、2018年、7～68頁。

ハイダマカ、A. 「悲劇を展示する」、東浩紀編『チェルノブイリダークツーリズムガイド』、genron、2013年、43頁。

ハーマン、J. 「トラウマ、家族、コミュニティ」、『こころのケアセンター』編『災害とトラウマ』、みすず書房、1999年、133～146頁。

東浩紀「チェルノブイリ博物館」、東浩紀編『チェルノブイリダークツーリズムガイド』、genron、2013年、42～47頁。

東浩紀『テーマパーク化する地球』、ゲンロン叢書、2019年。

平井京之介「「公害」をどう展示すべきか—水俣の対抗する二つのミュージアム」、竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶 戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』、東信堂、2015年。

クラインマン、A., クラインマン、J., ダス、V., ファーマー、P., ロック、M., ダニエル、E. V., アサド、T. 「他者の悲しみへの責任 ソーシャル・サファリングを知る」、坂川雅子訳、みすず書房、2011年。

Koh, E. “The Healing of Historical Collective Trauma.” *Journal of Genocide Study and Prevention* 7.5.20, 2020.

コロレーヴスカ、A. 「責任はみなにある」、東浩紀編『チェルノブイリダークツーリズムガイド』、genron、2013年、94～97頁。

前田幸男「構造的暴力論から「緩慢な暴力論」へ 惑星平和学に向けた時空認識の刷新に向けて」、日本平和学会編『平和研究』第54号、2020年、129～152頁。

モールド、R. F. 『目で見るとチェルノブイリの真実』、小林定喜訳、西村書店、2013年。

松浦雄介「負の遺産を記憶することの（不）可能性 —三池炭鉱をめぐる集合的な表象と実践—」、『フォーラム現代社会学』17、2018年、149～163頁。

永野三智子『みな、やっとの思いで坂をのぼる～水俣病患者相談のいま』、ころから、2018年。

日本科学技術ジャーナリスト会議『徹底検証福島原発事故 何が問題だったのか～4事故調報告書の比較分析から見えてきたこと』、化学同人、2013年a。

日本科学技術ジャーナリスト会議『4つの「原発事故調」を比較・検証する』、水曜社、2013年b。

高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』、集英社新書、2012年。

竹沢尚一郎「フォーラムとしてのミュージアム」、竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶 戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』、東信堂、2015年。

竹沢尚一郎「トラウマを超えて—東日本大震災の展示と震災遺構の保存をめぐる」、竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶 戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか』、東信堂、2015年。

津田大介「チェルノブイリで考える—報道、記憶、震災遺構」、東浩紀編『チェルノブイリダークツーリズムガイド』、genron、2013年、66～79頁。

Williams, P. “Memorial Museums: The Global Rush to Commemorate Atrocities.” Oxford. New York: BERG, 2007.

山名淳・矢野智司編著『災害と厄災の記憶を伝える』、勁草書房、2017年。

山下祐介『「復興」が奪う地域の未来』、岩波書店、2017年。

山田真『水俣から福島へ～公害の経験を共有する』、岩波書店、2014年。

山内宏康「博物館展示における 震災資料展示の課題と可能性 災害資料展示施設の普遍的ミッション構築のための研究とその意義」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第214集、2019年、13～45頁。